二〇二三年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二三年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。〔六枚のうち　その一〕

【一】　次の文章は、天皇の住まいである宮中に仕えていた藤原長子という女官（讃岐典侍）によって堀河天皇の発病からその死亡までが描かれた上巻と、再び彼女が宮中に呼ばれ、堀河天皇の息子である六歳の鳥羽天皇（新帝・幼帝）に仕えながら、亡き堀河天皇を恋しく思う様を描いた下巻から構成される古典作品『讃岐典侍日記』についての読書案内である。その文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ふれふれこゆき　たんばのこゆき」

①このやさしい童謡を、私はどこかで聞いたことがあるような気がしてなりません。

もしかすると、それは私が生まれるずっと前、むかしむかしの遠い代の子供たちのうたごえが、耳のそこに残っているからかもしれません。

「徒然草」百八十一段には、②鳥羽院がまだ幼くおわしたころ、雪の降る日に歌っていらしたと、讃岐典侍の日記にある、と書かれています。

私は、讃岐典侍という人の日記を読みたいものだと思いました。しかし、私が学んだころの国文科には、そのテキストはありませんでした。

「讃岐典侍日記」は、源氏・枕・伊勢・蜻蛉といった【A】星の光にけおされて③ひっそりと目立たぬ、地味な存在なのでした。そしてたとえよんでも若い日の私には、この日記のもつ重い悲愁は、理解しがたかったかもしれません。④中年になってめぐりあったしあわせ、という本はあるものです。

讃岐典侍は、王朝末期の堀河天皇にお仕えした女官です。堀河帝が二十九歳というお若さで⑤おかくれになったときの、その前後のもようを、悲しみを抑えて彼女は【B】、するどく的確に、かきとどめています。

堀河帝は英明な方でしたが、政治の実権はおん父・白河院の手にあり、天皇とは名ばかりの不遇なご日常でした。しかしやさしく優美なお人がらで、和歌にも笛にもごたんのうでいられ、人々は心から、若い帝を愛慕していました。讃岐典侍は帝のめのと子[*1]で、年ごろも同じほど、八年ものあいだ帝に身近く仕え、その心情は、男と女の愛情に近かったでしょう。日記にあらわれたそれは、帝王の崩御、というよりも、愛する一人の青年の死をめぐる悲しみと惑乱、という切実な辛さがあふれています。

嘉承二年（一一〇七年）七月、暑いさかりでした。帝のご病状あらたまり、宮中は物々しいa**雰囲気**に包まれます。加持祈祷[*2]のb**読経**の声はつなみのごとく、あたりをゆるがします。それを近くききつつ、若い帝は息苦しげに、足をうちかけ、「われは今日あす、死なんずる」などと仰せられる。

（帝のお言葉を聞く気持ちは、涙で息が詰まるばかりで、お返事も申し上げられず）

「きくここちち、ただむせかへりて御いらへもせられず……」「寝いらせ給へる御顔（帝のお顔をじっと見つめ申し上げて）をまもらへまゐらせて、泣くよりほかのことぞなき。いとかう、何しに馴れつかうまつりけんと、くやしくおぼゆ」

どうしてまあ、こんなに親しくお仕え申したのだろう、⑥帝に死におくれ奉るなどと悲しい目を見るくらいなら……と今さらのように八年ものあいだ、おそばで楽しくくらした月日が思い出され、胸ふたがるのでした。なまじ帝のお若さは、死の苦しみを増すようで、おん汗も吹き出、おん手も腫れたまい、お体のやりばのない苦しみに、彼女の首におん手をうちかけ、喘ぎたまうのでした。抱きおこせよ、臥せしめよ、

（苦しくて仕方がないので）（せめてこうしたみたら、楽になる気がするか）

「せめて苦しくおぼゆるに、かくしてこころみん、安まりやする」

と仰せられて、おん枕上の神璽[*3]をおさめた箱を、お胸の上に置かれたりします。お胸は苦しげにゆらぎ、息もたえだえのごようすでした。

一睡もせずお看護する彼女の耳に、明けの鐘の音が聞こえます。ほっとして朝の光が待たれるのでした。御前をさがって交代で【C】休む間もなく、たちまち使いが来て「のぼらせ給へ」とよばれます。帝にお食事をさし上げてみようというのでした。ひとりがおうしろから支え奉り、小さな台で、ほんの形ばかりおめし上りになる、ああなんと、お弱りになったことよ、と涙ぐまずにはいられません。

おやさしい帝は、そんなお苦しみの間にも、なぜ寝ないのか、と彼女を心配して仰せられ、また、お看病のため横に添い臥ししていますと、人が来たよと注意されて、彼女の姿をかくすように、おん膝を高くしてかばって下さるのでした。

あわただしく定められるご譲位のこと、御受戒の儀、おc**さいご**のときは一刻一刻と近づきます。氷などまいり（差し上げ）、おん汗をぬぐううち、

（ひどく苦しくなってきた。）（私は、死んでしまうんだろうなあ。）

「いみじく苦しくこそなるなれ。われは死なんずるなりけり……大神宮たすけさせ給へ。南無平等大会講明法華」ととなえられ、あまりの悲しさに讃岐典侍らは夢をみるここちで⑦「涙もせきあへず」というありさま。

「苦しうたへがたくおぼゆる、いだきおこせ」

と仰せられるのでお抱きしますと、おん腕はもう冷やかになっていられます。こんなに暑いさなかなのに……。指を水にぬらしてお口をうるおし、尊い僧正、帝の老いた乳母たち、彼女ら侍女たちは声を惜しまず、あたまから黒い煙が出るまでd**いっしん**不乱に読経し、お祈りをし、仏におすがりして今は奇蹟を念ずるばかり、あなやと思う間に、

（すっかり目の色が変わってゆく）

「むげにおん目などかはりゆく」

二〇二三年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二三年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。〔六枚のうち　その二〕

ごe**りんじゅう**とみてとって関白や内大臣は、たちまちおん父の白河院へ使いを出し、帝のおん枕を直し、抱いて臥せしめられます。

「かかるほどに、日、はなはなとさしいでたり。日のたくるままに、御色の日頃よりも白く、はれさせ給へる御顔の清らかにて、御びんのあたりなど、御けづり髪したらむやうに見えて、**ア**ただ大殿ごもりたるやうにたがふことなし」

死の業苦からいま解放されて、仏のみもとへおもむかれた帝は、安らかにお美しく、まるで、おやすみになっていらっしゃるようでした。

声をかぎりに泣き叫ぶ帝の老いた乳母たち、一緒にお召し下さいませ、とみんな、変わり果てたお姿にとりすがって泣きました。

讃岐典侍は、悲しい⑧宮中を退出しましたが思いがけぬことに、新帝・鳥羽帝に、またお仕えすることになりました。

雪のふる朝でした。何につけても、先帝が**イ**まだおわしますような気がされて、ぼんやりしている彼女の耳に、

「ふれふれ　こゆき
たゝまれ　こゆき
垣や木のまたに」

と【D】幼な子のうた声がきこえてきました。おや、どこの子か、とつい思い、おおほんに、あれは帝でいらせられるかと、**ウ**あわれ深い心地がされました。おん父堀河帝に五つで死に別れられた幼帝は、おん母君とも生まれてすぐ死別されており、幸うすいお身の上のいじらしさでした。はじめてお食事のお給仕にま近くお仕えしますと、走っていらしてお顔をさしのぞかれ、〈⑨この人は誰なの〉と仰せられます。堀河院のおん乳母子ですよ、とそばの人が申しますと、そうかと納得されるようす、昔、おん父帝のもとにまいられたとき、⑩堀河院がお可愛ゆくおぼし召されたときのことなど思い出されて讃岐典侍は切なくなるのでした。

幼ない帝は、夜おやすみになるお姿もお小さくいじらしく、お食事をまちかねて召し上るのもおかわゆく、彼女は、ま心こめてお仕えしているうちに諒闇[*4]も終り、世の中は花の衣になりました。

新帝も内裏にお渡りになります。夜の御殿のありさま、滝口の名対面、左近の陣の夜行、みな、先帝おわしましし頃と同じでした。内裏がお珍しい幼帝は、彼女に案内させてそちこちお渡りになります。

台盤所、昆明池の御障子、⑪みななつかしく、彼女は昔の知人にあう心地がして、でも、先帝だけはこの世にもうおわしまさぬのです。

幼帝をお抱きして、障子の絵をお見せしていると、夜の御殿の壁に、先帝が、あけくれ目なれておぼえようと思し召されて貼り付けておかれた笛の楽譜が、まだそのままにありました。つい涙ぐまれて袖を顔におしあてていますと、どうしたの、とたずねられます。あくびが出まして、つい、と申し上げますと、知っているよ、とさかしく仰せられ、〈なにをごぞんじでいらせられますか？〉〈うん、ほの字、りの字のことを思い出していたんだね〉ほりかわ……お父さまのことでしょう？……とのたまうおかわいらしさ、

「あはれにさめぬるここちしてぞ、笑まるる」

ふと心がさわやかに晴れて、ほほえまれるのでした。

死別のくるしみ、という人生最大の苦しみを経てきた彼女の、そのときの微笑は、やさしく明るいものだったにちがいありません。

「讃岐典侍日記」は、辛く切なく、そしてやさしい物語なのです。

（　田辺聖子　「ふれふれこゆき」『文車日記』一部改　）

＊1帝のめのと子……高貴な人を養い育てる女性のことを乳母（めのと）と呼ぶが、その乳母の実の子供のこと。つまり、讃岐典侍は、堀河天皇を育てた女性の実の子で、二人は兄弟のように育てられたということ。

＊2加持祈祷　……病気や災難を除くために、神仏に祈りをささげること。

＊3神璽　……皇位継承の印であるご神宝。

＊4諒闇　……（天皇の）服喪の期間。

二〇二三年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二三年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。〔六枚のうち　その三〕

問一　文中の波線部ａからｅの語句について、**ひらがな**は**漢字**に、**漢字**はその読みを**ひらがな**で答えよ。

問二　文中の空欄【A】から【D】に当てはまる語句を次から選び、その記号を答えなさい。

ア　とろとろと　　イ　けなげに　　ウ　きらびやかな　　エ　しめやかに　　オ　あどけない

問三　傍線部①「このやさしい童謡を、私はどこかで聞いたことがあるような気がしてなりません」とあるが、その理由についての説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　自分が生まれる前のことではあるけれど、母親のお腹の中でそれを聞いていたから。
イ　『讃岐典侍の日記』に書いてある内容を『徒然草』の中で読んだことがあるから。
ウ　遠い時代から伝えられてきた日本人としての様々な感情を、わらべ歌として伝え聞いたことがあるから。
エ　遠い時代から伝えられてきた鳥羽院の歌を、わらべ歌として伝え聞いたことがあるから。

問四　傍線部②「鳥羽院がまだ幼く負わしたころ、雪のふる日に歌っていらした」とあるが、「徒然草」では、鳥羽院が幼くていらしたため、歌詞を間違えたのだろうといった内容のことが記されている。そのことについての説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「降れ降れ小雪　寒波の　こ雪」と歌うべきところを、幼い鳥羽院が「丹波のこ雪」と歌ってしまった。
イ　「降れ降れ小雪　半端な　こ雪」と歌うべきところを、幼い鳥羽院が「丹波のこ雪」と歌ってしまった。
ウ　「降れ降れ小雪　たまれ（降り積もれ）こ雪」と歌うべきところを、幼い鳥羽院が「丹波のこ雪」と歌ってしまった。
エ　「降れ降れ小雪　田んぼの　こ雪」と歌うべきところを、幼い鳥羽院が「丹波のこ雪」と歌ってしまった。

問五　傍線部③で筆者は「讃岐典侍日記」のことを「ひっそりと目立たぬ、地味な存在なのでした」と述べているが、「讃岐典侍日記」はいつの時代に成立した作品か。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　平安時代　　イ　鎌倉時代　　ウ　室町時代　　エ　安土・桃山時代

問六　傍線部④「中年になってめぐりあったしあわせ」とあるが、中年になってめぐりあったことが、なぜ幸せなのか。「面白さ」という語を用いて三十五字以内で説明しなさい。

問七　傍線部⑤「おかくれになった」、傍線部⑧「宮中」とあるが、それぞれ同様の意味を表す語句を、文中の各傍線部より後の部分から漢字二文字で抜き出しなさい。但し、「おかくれになった」は「身分が高い人が死ぬ」ことを表す最上の尊敬語である。

問八　傍線部⑥「帝に死におくれ奉るなどと悲しい目を見るくらいなら……」とあるが、その内容の説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　天皇という国家の最高の存在を失ってしまうくらいなら、いっそ私の方が死んでしまいたい。
イ　天皇という国家の最高の存在を失ってしまったのは、長年天皇に仕えた私の配慮が足りなかったのだろう。
ウ　長年お仕えした天皇に先立たれて、こんなに悲しい思いをするくらいなら、最初から親しくお仕えなどするのではなかった。
エ　長年お仕えした天皇に先立たれて、こんなに悲しい思いをするくらいなら、もっと楽しい生活を送らせてあげたかった。

二〇二三年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二三年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。〔六枚のうち　その四〕

問九　傍線部⑦「涙もせきあへず」⑪「みななつかしく」の主語、傍線部⑨「この人」のさす内容及び、傍線部⑩「堀河院がお可愛ゆくおぼし召された」という動作の対象として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　白河院　　イ　堀河天皇　　ウ　鳥羽天皇　　エ　讃岐典侍（藤原長子）　　オ　僧侶

問十　二重傍線部**ア**「ただ大殿（おおとの）ごもりたるやうにたがふことなし」、**イ**「まだおわしますような気がされて」及び、**ウ**「あわれ深い心地がされました」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「ただ大殿（おおとの）ごもりたるやうにたがふことなし」

ア　ただ貴族としての振る舞いにしか見えません。

イ　ただ貴族としての振る舞いとしては、間違いありません。

ウ　ただ貴族としての誓いを破ることだけはしないはずだ。

エ　本当にお休みになっているようにしか見えません。

イ「まだおわしますような気がされて」

ア　とっくに亡くなったとは信じられなくて、

イ　とっくにお亡くなりになったような気がして、

ウ　どこかまだ怒っていらっしゃるような気がして、

エ　どこかまだ生きていらっしゃるような気がして、

ウ「あわれ深い心地がされました」

ア　いじらしい気持ちに苦しめられました。

イ　いじらしい気持ちが込上げてきました。

ウ　いじらしい気持ちで責め立てられました。

エ　情けない気持ちになってきました。

【二】　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①大和国に、龍門といふ所に、聖ありけり。住みける所を名にて、②龍門の聖とぞ言ひける。その聖の親しく知りたりける男の、明け暮れ鹿を殺しけるに、照射といふ事をしけるころ、ⓐいみじう暗かりける夜、照射に出でにけり。

（照射という狩猟法を使う夏の頃）

鹿を求めありくほどに、目を合はせたりければ、「鹿ありけり」とて、押しまはし押しまはしするに、たしかに目を合はせたり。

（ふと鹿の目が松明の光を受けて光ったので、「鹿がいたぞ」と、松明を振り回し振り回ししていると）

（よく矢の届く距離まで近づき、支えになる木に松明をひっかけ、矢をつがえて射ようと弓を振りたてて見ると、この鹿の目と目の間が）

矢頃にまはし寄りて、火串に引きかけて、矢をはげて射んとて弓ふりたて見るに、この鹿の目の間の、例の鹿の目のⓑあばひよりも近くて、目の色も変りたりければ、③あやしと思ひて、弓を引きさして、よく見けるに、なほあやしかりければ、矢をはづして、火を取りて見るに、「鹿の目にはあらぬなりけり」と言ひて、「起きば起きよ」と思ひて、近くまはし寄せて見れば、身は一定の皮にてあり。

（弓を引くのをやめてよく見ると、やはり変だったので、）

（松明とともに近くまで寄ってみると、確かに疑いようのない鹿の皮で）

二〇二三年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二三年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。〔六枚のうち　その五〕

「なほ鹿なり」とて、また射んとするに、なほ目のあらざりければ、ただうちにうち寄せて見るに、法師の頭に見なしつ。「こはいかに」
（もうどんどん近寄ってみると、法師の頭であることがわかった）
（馬から下りて走り寄って、火を吹いて明るくして、松明の芯を手に取って見ると）
と言ひて、おり走りて火うち吹きて、しひをりとて見れば、この聖の目うちたたきて、鹿の皮をひきかづきて、そひ臥し給へり。
（お前は、私が止めるのも聞かず、むやみにこの鹿を殺す）
「こはいかに、④かくてはおはしますぞ」と言へば、ほろほろと泣きて、「わ主が制することを聞かず、いたくこの鹿を殺す。われ、
（残念なことにお前は私を射殺さなかった）
鹿に代りて殺されなば、さりともすこしはとどまりなんと思へば、かくて射られんとしてをるなり。くちをしう射ざりつ」とのたまふ
に、この男、⑤臥しまろび泣きて、「かくまでおぼしけることを、あながちにし侍りけること」とて、そこにて刀を抜きて、弓打ち切り、
（矢の入れ物をみな打ち壊し）
やなぐひみな打ちくだきて、⑥もとどり切りて、やがて聖に具して、法師になりて、聖のおはしけるかぎり、聖に使はれて、聖失せ給
（高僧に代わってずっと同じ所で勤行をしていたということである）
ひければ、代りてまた、そこにぞおこなひてⓒゐたりけるとなん。

（「龍門の聖、鹿に代らんと欲する事」『宇治拾遺物語』一部改）

問一　傍線部①「大和国」とあるが、これは、現在の都道府県のどこにあたるか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　大阪府　　イ　兵庫県　　ウ　京都府　　エ　奈良県

問二　傍線部②「龍門の聖とぞ言ひける」とあるが、ここで用いられている文法規則を何というか。漢字かな交じりの七文字で答えなさい。

問三　波線部ⓐ「いみじう」ⓑ「あはひ」ⓒ「ゐたりける」をそれぞれ現代仮名遣いに直しなさい。

問四　傍線部③「あやしと思ひて」とあるが、猟師の男はなぜ「あやし」と思ったのか。四十字以内で答えなさい。

問五　傍線部④「かくてはおはしますぞ」とあるが、

i：高僧は何をしていたのか。二十字以内で簡潔に説明しなさい。

ii：なぜ高僧はこのようなことをしていたのか。その理由を四十字以内で答えなさい。

問六　傍線部⑤「臥しまろび泣きて」とあるが、なぜ猟師の男は「転げまわって泣いた」のか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　高僧の放った矢が、尻に直撃したから。　　イ　松明の火が、尻に燃え移ったから。

ウ　反撃した鹿の角が、尻に刺さったから。　　エ　高僧の行動に感動したから。

問七　傍線部⑥「もとどり切りて」とあるが、「もとどり」とは髪を束ねたものである。傍線部では、猟師の男がどうなったことを表現しているのか。十字以内で簡潔に答えなさい。

問八　i：『宇治拾遺物語』や『今昔物語集』などのジャンルを何というか。漢字で答えなさい。

ii：『宇治拾遺物語』と同じ時代に書かれた作品を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　源氏物語　　イ　枕草子　　ウ　万葉集　　エ　平家物語

二〇二三年度　樟蔭高等学校　入学試験　問題用紙　【国語】

二〇二三年二月十日　実施　　解答は解答用紙の所定の欄に記入すること。　〔六枚のうち　その六〕

【三】　次の問一、問二の問いに答えなさい。

問一　次の文章は、ある生徒が職員室を訪れた際の言葉づかいについての、先生と生徒との会話について記したものである。文中の空欄（　①　）から（　⑤　）に当てはまる単語を**全て漢字で**答えなさい。但し、（　①　）（　②　）（　③　）には**品詞名**を、（　④　）（　⑤　）には**敬語の種類**を答えること。

「済みません。〇〇〇〇先生は、いますか。」

「ねえ、きみ。今のきみの言葉づかいは、あながち間違っているとは言えないけれど、少し言い方を変えた方がいいね。」

「有難うございます。では、どこが具合の悪かったところか、教えてください。」

「それは、最後の『いますか。』の部分なんだよ。『いますか』というのは、（　①　）「いる」と丁寧の意味を表す（　②　）「ます」、それに疑問の意味を表す（　③　）「か」から成り立っていることは、分かるね。ところが、（　④　）というのは、話全体を丁寧にしたり、話題についての聞き手に対する敬意を表す表現なんだ。だから、きみは「ます」という表現で、職員室にいる先生方全員には、丁寧な言葉づかいできちんと敬意を表現したことになるんだ。」

「なるほど。」

「ところが、きみが職員室に訪ねてきた相手である〇〇〇〇先生への敬意が十分に表現されているとは言い難いんだよ。だから、〇〇〇〇先生の動作である『いる』を（　⑤　）の『いらっしゃる』に直して『いらっしゃいますか。』と言えば、最高だったね。」

「ていねいなご指導を有難うございました。次から、気を付けたいと思います。」

問二　次のア～コの「作者と作品名」の組み合わせを記したもののうち、正しいものを五つ選び、記号で答えなさい。

ア　尾崎紅葉―金色夜叉　　イ　森鷗外―坊っちゃん　　ウ　夏目漱石―高瀬舟　　エ　田山花袋―蒲団

オ　島崎藤村―道程　　カ　志賀直哉―トロッコ　　キ　菊池寛―父帰る　　ク　芥川龍之介―城崎にて

ケ　萩原朔太郎―月に吠える　　コ　小林多喜二―蟹工船